

# 聖々丘

第44号  
2022・6・12 発行  
金光教教学研究所

## 『教祖探究』はくり返される

第一部部長 岩崎繁之



昨年、紀要『金光教学』第六一号に「御金神様御さしむけ金銭出入帳」の写真と解説文が掲載された。このこと

により、『金光大神事蹟に関する研究資料』の刊行（令和元年）に始まった金光大神直筆帳面の公開がひとまず終わり、今後は、研究活用へと移行することになる。

これら資料を通じて明らかとなったのは、金光大神が在世中に様々な記録を認めていたことである。ここから、金光大神のこれまで知られていなかった一面が知られることはもちろん、これまで知られてきた出来事も改めて見直しが進められていくことになると思われる。

ところで、同時に明らかになったことの一つに、金光宅吉が「覚書」のみならず、「覚帳」や

「年譜帳」も筆写をしていたという事実がある。詳細は、拙稿「金光宅吉による「お知らせ事覚帳」の筆写について」（紀要五六号）で述べているので、ここでは、宅吉による「教祖探究」に注目して述べていく。

これまでは、金光大神の五〇日祭の日より境界御用に従事することになった宅吉は、「覚帳」や「覚書」の奥書から、「覚書」は筆写したが、「覚帳」は通読のみであったと推測されてきた。しかしながら、新たに加わった資料により、宅吉は「覚書」筆写の前に、明治一七年から「覚帳」を、続いて「年譜帳」を筆写し、およそ一年がかりで一つの帳面の形に調べていたことが分かった。境界御用の合間を縫って「覚帳」や「年譜帳」を書き写していた宅吉は、その内容の詳細を母に尋ねることもあっただろう。母とせは、宅吉によるこの筆写の成就を待っていたかのように同年末に帰幽している。そしてその後、宅吉は、明治二十一年旧八月四日、「覚書」を写し終えたのだった。

後の金光教団では、宅吉筆写本「覚書」を主たる資料の一つとして教祖の信心を探究し、昭和五八年に金光大神直筆「覚帳」が加わると、両書をもとにして信心の探究がなされてきた。そしてさらに新たな資料の登場である。もちろん、新たな資料が加わったからといって、「教祖探究」の姿勢や目的は変わるものではない。とはいえ、資料

相互の関係性に悩みながらの探究であることに違いはなく、今後、どのような教祖と出会うことになるのか期待が高まる。

さて、このような貴重な事態に出くわしたのは私たちが初めてかというところではない。数ある書き物の中から、「覚帳」、「年譜帳」、「覚書」を選び取り、書き写した宅吉が、最初の人となる。様々にあつた書き物を整理していったのも宅吉だろうか。このように、今日の新たな資料状況とは、元を正せば宅吉が境界御用を始める中で出会った状況と重なるのだが、それはいったいどういう問題を投げかけているのだろうか。



晩年の金光大神と書き物についての様子を、高橋富枝は伝えている（『事蹟集』高橋五六六）。「：私のは、無筆ものの事じやから、人にお見せ申す事は出来ぬが、忪が居りますから、よいようにしてくれましようわい。『ようもようもこう言う事が出来ましたのう』今朝からも、何度も何度も日天四、月天四がそう仰しゃる。『よう、これ迄勤めて呉れたのう』と仰しゃりますじや」と金光大神は言い、涙を流したという。この時の書き物は「厚さ二寸余」であつたとされ、約六cmの厚みの書き物とは、複数の帳面が手許に置かれていたことをうかがわせる。それが「忪」に託された。萩雄や宅吉が念頭にあつたと思われる。

後に、結界御用に従事する中で、これら書き物を読み、書き写した宅吉は、ある時、参拝者に、「何でも、あなたは煙草をやめて長生きをしなければ。私も、折に前神様のお残しになった物(書き物)を眺めますと、六十年向こうが楽しみじゃ。お前さんも長生きをしなければ」と話したという(「金光四神言行資料集」杉田政次郎三五)。「六十年向こう」とは、孫やその先の未来へ向けた願いであり、金光大神の書き物にその願いを見出した謂である。これら金光大神の書き物や宅吉筆写本は、萩雄や宅吉の子孫を通じてそれぞれ大事に所蔵され、結果的に現代の私たちの手許に届けられることになった。

残念ながら「覚書」と「年譜帳」の金光大神直筆は所在不明であり、その内容は宅吉筆写本から知る他に手立てはない。しかし一方で、それら筆写本があるからこそ、直筆資料が確かに存在したどうかがい知ることができ。幸い、「覚書」は直筆と筆写本の両方が現存するので「覚書」等の直筆を探る貴重な手がかりとなるに違いない。

「教祖探究」はくり返されてきた。そしてその都度、願いは重なり合いながら、その先へと向けられている。金光大神の書き物を読み、そこからどのように、そしてどのような先を楽しむことになるのか。その長い道のりは、改めて始まりを告げている。(大阪・大仁教会)

## ◆令和四年度の計画◆

本年度は、研究生一名を加え、所長以下総勢一五名でのスタートとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

\*新型コロナウイルスの感染状況によって、日程等に変更が生じる可能性があります。

### 紀要論文講読セミナー

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】各日一三・〇〇～一四・三〇

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れる方も意識した取り組みです。

本年は、次の四本の論考を取り上げます。参加希望の場合は事前にご連絡下さい。

なお、開講日・内容などが変更となった場合には、金光新聞や金光教本部フェイスブック、教学研究所ホームページなどを通じて随時ご案内いたします。

### 〈実施済み〉

【第一回】五月一〇日(火)

担当・須崎真治

児山真生「地域の社会関係と講社―神道金光教会時代の「講社署名簿」を手がかりとして―」

〈予定〉

(第四七号)

【第二回】七月一〇日(日)

担当・橋本雄二

福嶋義次「慣習世界と信仰形式―金光大神理解研究ノート―」 (第一五号)

【第三回】九月二三日(木)

担当・塩飽 望

大林浩治「神の現前性への問い―明治末大正期の「教え」と「おかげ」の諸相から―」 (第五三号)

【第四回】十一月一〇日(木)

担当・森川育子

宮田真喜男「大正六年から十一年頃の畑教監時代の教団の問題」 (第一一号)

### 第六一回教学研究会

【場所】金光北ウイングやつなみホール

【日時】六月一七日(金)

本年は、来場参加とオンライン参加を併用する形で、開催します。内容は、個別の研究発表と、「信心とその言葉―救済への問い―」をテーマとした全体会(発題・討議)を予定しています。

### 第一六回教学に関する交流集会(予定)

【場所】本部総合庁舎一階展示室

【日時】十一月五日(火)

信奉者との討議や意見交換を通じた、相互の問題関心の醸成を願う取り組みです。本年度は、金光図書館の協力を得て、開催し

ます。内容は、教祖の事蹟に関する知見等の紹介と懇談を予定しています。霊地在住の方ももちろん、どなたでもご参加頂きます。

参加希望の場合は事前にご連絡ください。

**第二三回教学講演会(予定)**

【場所】金光北ウィングやつなみホール

(北ホール)

【日時】一〇月一日(土) 夕刻

生神金光大神大祭第一日の前夜に、紀要第六二号の研究成果を題材にした教学講演会を開催する予定です。

○

この他、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

また、本年度から、資料室を中心に「資料管理ゼミ」を立ち上げました。本所の資料管理、保全の充実化、さらには教団の資料管理について、これからのあり方を検討してまいります。

なお、例年、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図るべく、他宗教教団・宗派との研究交流(教団付置研究所懇話会)や、一般諸学問との交流を行っています。今年度も情況に鑑みつつ、進めてまいります。これら取り組みを通じて、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培ってまいりた

いと存じます。

◇令和四年度研究題目◇

〈第一部 教祖研究〉

・「覚帳」、「年譜帳」、「覚書」書き分けの究明

―帳面相互の影響関係に向けた基礎的研究―

所頁 岩崎繁之

・「金乃神様金子御さしむけ覚帳」を手がかりとした「広前」への考察

―訪れた者達と金光大神の関係に注目して―

所頁 堀江道広

〈第二部 教義研究〉

・原子爆弾による経験の諸相とその意味

―神仏論・救済論に注目して―

所頁 高橋昌之

〈第三部 教団史研究〉

・昭和戦後期における「教祖」受容の諸相

所頁 白石淳平

・明治中期から大正期にかけての社会と金光教

―社会事業の実践に見る社会の現前性と信心への意味―

所頁 山田光徳

・近代移行期における都市形成と布教

―岡山市域の神道金光教会支所に注目して―

所頁 須崎真治

・昭和初期の青年における信心希求

―松鷹長一に注目して―

所頁 森川育子



第60回教学研究会 (11月19日)

## 追悼 瀬戸美喜雄先生

令和三年一月二六日、本所元所長であられた瀬戸美喜雄先生が、御帰幽になりました。先生は、昭和三五年に研究生として入所された後、助手(同年)、所員(昭和三八年)、部長(昭和五〇年)、所長(昭和五二年〜同五六年)を務められました。

ここに、先生の御遺徳を偲び、諸先生方から頂戴いたしました稿を掲載させて頂きます。



瀬戸美喜雄先生(平成26年)

## ガリ版上のプリンス

早川公明



瀬戸先生には、研究所を去られて後も、布教教義書や新教祖伝の執筆・編集など教団の重要な御用に

当たらせてもらい、何かとお取り立て頂き、親しく接しさせて頂いて、生涯お世話になった。

が、何といっても想い出深いのは、指導所員として直接面倒を見て頂いた研究所時代のことだ。

私が研究所に入所した頃、瀬戸先生には、「ガリ版上のプリンス」というあだ名が付けられていた。当時は研究報告の原稿をガリ切りして謄写印刷して提出していた。先生の場合は、締切り日の間際になって、原稿は未完のまま、直接ガリ版上に鉄筆で文章を書き込むのである。さらにそれを推敲して訂正となると、ロウ原紙をセロテープで切り貼りして継ぎ足し、粘りに粘って何とか間に合わせる。それなのに提出された論文の内容は、いつも完成度が高くスマートに仕上がっているのだ。まさに離れ技といってよいほどのものだったが、故人になられた恩師の名誉のために断っておくと、先生は期日直前まで、私達助手が原稿を書きあぐねている状態に付き合ひ、時間を割いて面倒をみてくれていたのである。私も紀要論文に推挙されることになった研究報告執筆の時、結論部の書き方に困ってしまった。締め切間近にも拘わらず先生に弱音をはき窮状を訴えた。先生は自分の執筆時間がなくなるのに、私の原稿を丁寧に読み直し、「結論でさらに新しいことを付け加えようとし過ぎず、もう一度各章のまとめを示すだけでいいんじゃないか？」と助言してくれ、それで気が軽くなって仕上げられたということがあった。そんなわけで先生自身は最後の最後にガリ版上で奮闘せざるを得なかったという面があったと思う。だとしても先生はやはり取り掛かりが遅かったのは確かだ。締切日が近くなっても、原稿に向かうでもなく、さりとして焦っている素振りも見せず、椅子にもたれて黙って目を閉じている。そんな先生の姿が今も浮かんでくる。さあ、いつでも相談に乗ってやるぞ、という余裕が感じられて頼もしかった。

これは論文作成においても言えることだが、先生は様々なことを器用にこなし、しかも粘り強く取組める人であった。私達の時代、昼食後のひと時を前庭でバレーボールをして過ごすようになった。すると先生は、下淵の作業場から廃材の柱を二本貰ってきて、地面を掘り起こしてコンクリートを流し、柱の上部に滑車までと

りつけてネットの支柱を拵えて下さり、数日かけてより本格的なバレーコートが出来上がった。

また、ある時、本谷西側の丘の一隅（金光和道家の所有地）を耕作し、「文さ農場」と名付けて農耕体験をしようということになった。木の切株がいっぱい残っていたので、根を掘り起こして開墾するのは大変労力の要る作業だった。ところが我々がやつと根っこ一つ取り除く間に、先生は二つ三つ掘り起こしてしまうのだ。それほどがっしりした体格には見えないのに、子供の頃に農作業や力仕事を手伝わされていたとかで、道具の使い方のコツを身につけており、なおかつ根気よく作業に精を出して畑地を完成させた。

ところで、先生の粘り強さは、高校駅伝の名門世羅高校で陸上部の長距離ランナーとなるべく励んだ時に培われたものだったらしい。いつも、母校が出場する時には実況中継にかじりついて応援していた。そして、昨年末、世羅高校が全国優勝を果たしたその日、駅伝の実況中継を教会一階の自室で見られる時に神去られたと、後で聞き知った。それもまた先生にはふさわしい貴き御一生の終焉の迎え方だったと、改めて思わせて頂いた。

（愛知・牧野教会）

## 瀬戸美喜雄先生を偲んで

藤井 潔



先日、研究所からお電話を頂いた。「瀬戸先生を偲んで」という内容で、何か書いて下さい、とのこと

とであった。研究所時代については早川先生が書かれるということなので、私は本部教庁での瀬戸先生のお姿を偲ぶこととした。

平成二年八月に津田内局が発足し、その十二月に私は布教部での御用を頂いた。翌三年一月、布教部に「布教教義研究室」が設置され、その室長として瀬戸美喜雄先生が御用に当たることになり、その元で私も御用することになった。その内容は、すでに平成元年六月に刊行されていた『天地は語る―金光教教典抄―』を素材に、布教する教団として、教義の究明と展開を願うための「布教教義書」を刊行するというもので、当時の教団課題を担うための瀬戸先生の登場だったと思う。

研究所時代、すでに多くの金光大神事蹟研究の成果を現わしてきた瀬戸先生だが、今度は『金光教教典』の「覚帳」「覚書」ではなく、「金光大神理解」に焦点を当てての布教教義的な課題、

言いかえれば、「現代社会にあって金光大神の信心を、世界に伝え現わす」との教団課題に正面から取り組むことになった。

立教百三十二年、教祖百八年の信心の営みとして、全教において毎日営まれ続けてきた信仰の内実を言葉にもたらず、という試みは恐れ多いことなのかも知れないが、瀬戸先生の金光大神様のご事蹟に向かわれる真摯な姿勢と、金光大神様の信心から発せられるご理解の言葉への共感的理解、あるいは実在的理解が、そうした挑戦的営みを可能にしたのではないかと思う。

その中でも、特に印象的な表現は、「布教教義書」として刊行された『神と人 共に生きる』中、「二章 金光教における助かり、(三) 取次とあいやかけよ」(一一二頁)の、「本教は「生神金光大神取次によって、神・人あいやかけよで共に立ち行くあり方を世界に顕現していく道である」ということになりました」との一文である。後の平成十年の制度改正において、教規に、本教の目的として示される文章が、ここに現されることになった。

今日、教団の願いとして示される、「教祖様の「神人物語」をお手本に、それその「神人物語」を編む」との願いも、この瀬戸先生によって示された、「神と人、共に生きる」という信仰表現、信仰世界から始まったのかな、などと思ったりするのである。

（広島・尾道西教会）



第4回教学に関する懇談会「教学叢書『金光教祖の生涯』を語る」(中央、昭和55年)

## 教祖探求の熱量を感じて

第三部部长 白石淳平



「只養生来愚(ただせいらいのぐをやしなうのみ)」。

私の在籍教会に長年掲げられてあった

掛け軸の言葉だ。裏面には、「愚かさを脱して、賢く利口な者たらんとするより、「あほうはあほう連れで道を開きましょうや」(金光大神様の高橋富枝師への言)、「馬鹿とあほうで道を開け」(金光四神様の吉木栄蔵師への言)の言の如く、生来の自分の愚かさに気づき、それを養い、それに徹する私でありたい、との意」との由来が記されている。現教会長である私の父が、昭和五年に本部職員を退く際、以後の指針とすべく、自身の研究生時代以来師と慕う瀬戸美喜雄先生にお願いし、賜った書だという。

奇しくも同年に生を受けた私はいえ、研究所に奉職することとなった十数年前、それがあの瀬戸先生の書だったことに、遅ればせながら驚かされた次第である。教会の風景にあまりに馴染んだ掛け軸であり、また先生の論文のスマートな印象からした意外さもあったからだ。

しかし今となって、教祖を問い求め続けられた先生のお姿を、改めてこの書に見させられる思いがしている。奇しきご神縁を感じつつ、先のご研究の歩みを振り返ることで、改めて、右の書に込められた思いをたずねてみたい。

◇

瀬戸先生の初期の研究は、所謂「追体験的方法」による「人間教祖」という文脈に発するものと位置づけられる。超越的な契機よりも人間としての信心の形成過程を重視するその解釈は、人間を「どれほど尽してもなお尽しきれておらぬと自覚する存在」(五号「金光教とキリスト教の比較研究」八二頁、昭和三七)とし、教祖に「神の無限性・自己の有限性の体得」(七号「教祖の信心の基本的特性」四四頁、昭和三九)を捉えるものであった。

そうとして、『金光大神覚』、『概説金光教』の公刊へ向けた準備が進められていく昭和四〇年代、急激な社会変動による諸問題も相俟って、そうした研究態度は問い直されることとなっていた。歴史の中に生きる教祖として、より客観化・対象化して捉えようとする「事蹟解釈」の登場である。そこでは、民衆思想史や民俗学等、諸学の影響も受けつつ、幕末期の村落共同体や世間を舞台として、教祖の信心の意義が慣習的通念の「囚われ」からの開放に求められた。

大患の事蹟をそれぞれ前後半で考察し、天地

金乃神の両義性を検討した一〇号「教祖四十二才の大患の事蹟について(一)」「(昭和四五)、一  
二号「同(二)」「(昭和四七)や、教祖の勤勉さを個人的資質や生い立ちでなく時代社会との相互  
連関において捉えた一四号「近世後期大谷村の  
社会・経済状況について」(昭和四九)といった  
同時期の瀬戸論文も、そうした方法的推移の中  
で生み出された成果であったことになる。

そうして、明治期の社会変動を生き抜いた教  
祖の信仰内実を窺う一六号「維新时期における金  
光大神の信仰」(昭和五一)を経て発表された論  
文が、一七号「神の怒りと負け手」(昭和五二)  
である。今として同論文は、「覚帳」の公開を目  
前にして、「覚帳」への意識を垣間見せつつ、「覚  
書」に基づいてなされた教祖・教義研究の臨界  
点だったといえようか。

改めて注目したいのは、「神の」とされたその  
タイトルだ。それまでは教祖、金光大神、赤沢  
文治という人間を主体としてきたのが、ここで  
は神が主体となっているのだ。時代社会に対峙  
する信仰主体として教祖を問うそれまでの研究  
との格闘を、ここに捉えられよう。

同論文では、天地金乃神の神性への論及を通  
じて、当時の現代社会における、人間存在を自  
閉させるのみならず、聖なるものを矮小化させ  
るような近代的思考が批判される。もちろん、  
論述のスタイルは、例えば「無礼」の段階的な

自覚というように、あくまで「覚書」の記述に  
金光大神の認識を直結させる従来の方法をベー  
スとしたものと押さえられる。そうとして、「神」  
をタイトルに掲げた本論文には、瀬戸先生ご自  
身のそれまでの歩みを含め、教祖・教義研究に  
おける「近代の超克」に挑もうとした、その格  
闘が滲んでいるように思うのだ。

そしてその三年後、それまでの研究の集大成  
として、**教学叢書二『金光大神の生涯』**(昭和五  
五)が世に問われることとなった。信心の「範型」  
(四頁)として教祖の認識・内面を問うという  
意味では、初期の研究から一貫した視座で描か  
れたものといえる。しかし、右に見た格闘の歩  
みからすれば、そのこと自体、(教祖像のスタン  
ダード)を築くことになったトップランナーか  
ら後進に投げかけられた、さらなる研究展開へ  
の願いだったのではないだろうか。



さて、「覚帳」登場以降のお知らせ解釈など、  
後の教祖研究の問いは、信仰的自律性を自覚的  
にしていった「近代的自己」としての教祖像へ  
の疑義に発しているところが大きい。さらに、  
近年の新資料の登場を踏まえた成果にもあらわ  
れてきているように、一人金光大神という主体  
的人格の問題としてではなく、周囲との関係や  
交渉において確認される信仰的意味に目を向け  
ていこうとする研究が萌している今でもある。

このように見てくると、瀬戸先生の教祖探究  
における「近代」との格闘が、こうした昨今の  
動向を後押しするエールとして、その熱い思い  
と共に冒頭の書に込められているように感じら  
れてくるのだが、どうであろうか。教学研究の  
これからへ向けて、先人の成果から何をどのよ  
うに読み出し、批判的に展開させてゆくのか。  
その直向きな格闘を強く願っておられる先生の  
熱量が、今、ひしひしと伝わってくる。

(愛媛・南宇和教会)



第26回教学研究会で総括発表(昭和61年)

★提

評議員

浅野 弓

★言

期待しています！



「とても私なんか…  
と言うべきであったの  
に、図らずも教学研究  
所の評議員を受けさせ  
て頂くことになった。

断らなかつたのには私なりの訳があつた。

それは父から聞いた話に起因する。父は、その昔、大淵千仞先生から、教学研究所での何らかのお役を仰せつかつた。そのお役はその頃の若い父には荷の重い大きなお役だつたそうで、「とても私にはできません」と断わりに行つた。そしたら、大淵先生は、「できるかどうかはわかつておる。それはこちらの決めることである」と言われて、お受けするしかなかつた、と言つていた。それが、それからの父の、御用を受ける姿勢となり、私にも、よくその話を聞かせてくれた。

大淵先生の口ぶりは「君ならできると思つて、指名したのだよ」という優しいものではなく、「今の君にできるとは思つていない。そんなことは

百も承知である。しかし、君にやらせることに意味がある」そういうことだつた、と思う。この話は、私の心に、とても響いた。お役を頂くという事は「君ならできるからやれ」ではなく、「できないことは承知しているが、君にやらせることに意味がある」という場合もあるのである。

私にとっては、お役を頂くたびに思い出す逸話であるが、教学研究所の、教学研究らしい逸話に思える。そして、当時の先生方の御用への姿勢の厳しさを思うのである。今の教学研究所にも、こうした教学研究らしさを醸し出す雰囲気を見失わないで頂きたいというのが、一つの提言である。

この私が六年前に「とても私なんか…」と言うべきであつたのに、教務理事というお役を受けさせてもらったのも、こうした背景があつたからである。

結局のところ、「とても私なんかでは…」という御用内容であつたが、その中で、やはりたくさんのご経験を、学ばせて頂いたと思つている。そして、大いに研究所のお世話になつた。

私たち内局は、今の厳しい教団状況の中で、教規の中では一番教会に身近な連合会に焦点を当ててこの状況に立ち向かおうと、全国教会連合会長協議会を企画した。初めての試み、と思つてはいたが、調べてみたら、戦後と立教百年の時

に前例があることがわかつた。

金光新聞(当時の教徒新聞)で概要をみつけ、「紀要」を辿つて、戦後の混乱期に、時の内局が連合会を対象に、どのような動きをつけようとしたかを調べる事ができた。そういう時に、「紀要」は何でも答えてくれる頼もしい存在であつた。

教学研究所に於いて、教団の歴史が地道に、広く、深く研究されていることは大したことだと改めて思つた。教学研究所はまさに教団の尊い財産であり、誇りであることを実感できたのである。

また、布教部長であつた私は、全教から布教の可能性の提示を期待されているということを感じていた。その中で私は、今の教団には社会的貢献が大切であり、それを布教に繋げたいと考えていた。ちょうどその時、「紀要」を読む中で「金光教と花街 都市布教と民衆」という、研究所での講演記録に出遭い、これぞお差し向けと、とても感動した。

こうした、その時代に必要とされる人助けが、今の時代の私たちにもできないかと模索し、布教センターとの協議資料にした。しかし、悲しいかな、ただの提言で終わってしまった。

そこで私のもう一つの提言は、過去の研究財産を、今の時代に還元する方法を模索してほしいということである。

わずかな任期の一時期を走りぬける当局では、目の前の課題で精一杯である。しかし、絶えず、歴史を振り返り、歴史に学ぶ中から、今をリードする視点を示唆することが研究者にはできないのではないだろうか。そうした視点を研究者に持って頂いて、時の当局に提言して頂けたらと、期待したい、それが私の切なる提言である。

(愛知・今池教会)

## 令和三年度研究報告

### 検討会を振り返って

#### 歴史から問われる信心

第三部所員 森川育子



令和三年度は、九本の研究報告が提出され、それぞれ検討会が行われた。私は、検討会に際して研究報告を読み、困難な問題に出会った人々の対応が重なって大きな動向となっていく、謂わば時代が生まれていく、創られていく様子を垣間見たように感じ

た。さながら、置物だと思っていた猫が実は生きていて、こちらをじっと見ていることに気付いたような驚きだ。

本教信仰と社会の関係は、これまでも述べられてきたことは承知している。ただ、報告内容を通じて、社会との関係で取り上げられる「本教」や「教団」といった集団の時代的特徴といったものが、人々の対応により現れ出る様を眼前に突きつけられるような迫りとともに、それぞれの歴史の新たな側面を見せて貰ったような面白さを感じるようになった。

その観点から、まず取り上げたいのが、岩崎繁之「金神社活動と「明治四年」—金神信仰組織再編へ向けた態勢の問題の位相—」である。

岩崎報告では、主に金神祭祀に関わる金銭の收支記録である「御金神様さしむけ金銭出入帳」及び、神職関連の新たな資料の読解、また既存の諸資料との相互関係を検討している。このことにより、金神の祭祀を通じて行われた信仰活動のうち、慶応三年から明治四年にかけての金神社主金光河内の活動の特質を、「生神金光大神社」等の信仰活動の態勢に関わる神の言葉(御知らせ)との関連から把握し、その信仰史的意義が究明されている。それは、「年譜帳」起筆の動因と目される明治四年の様相へ向けて、新たな知見を提示するとともに、従来の金神社への理解や、それに関わって形成されてきた金光大

神の信仰史像に再考を促す取り組みとなっている。

とりわけ私が興味をもったのは、金光大神が、社会の中での役割を担う宗教者として、どのような問題に直面していたのかが描かれている点である。金光大神が神社行政の一端をも担う神主金光河内として、村や藩、国家行政と関わりながら活動している様子からは、社会的関係に生きる宗教者としての姿を思わされる。ともすれば、自己の信仰内面の問題として、神との一対一の関係に収めて救済を考えがちな中において、神との関わりを生きると同時に、人々と関わりを生きていた金光大神のありようが、神と人は勿論、人と人の関係により営まれてきた本教の歴史をリアルに思わせるのだ。

もう一つ取り上げてみたいのは、山田光徳「本教信奉者における対社会意識の生起と諸活動—教団独立前後を中心に—」である。この研究は、明治末から大正期、各地に多くの団体が結成される動向への関心から、各団体が掲げる目的の類別を通じた全体的様相把握と、団体結成の背景を究明する中で、そこに当該期における対社会的な意識がうかがわれたことに端を発している。当時の信奉者の、社会をめぐる経験への問いに迫った本年度研究報告では、明治一〇年前後から一教団立期頃を主な対象として、当時の信奉者に社会は如何に現前し、所謂対社会意識

は如何にして生起するのか。またそうした意識は、如何なる実践、経験を生むのかの追究が試みられている。

具体的には、佐藤範雄などによる本教社会事業が事例として取り上げられたのだが、その中で山田が関心を向けたのは、従来見られた信奉者による信仰信念や自負に基づく主体的な実践ではなく、問題に相対したときに見せる即応的な実践の様相である。時代状況の変転に伴う、逃れられない苦しみや問題に直面した人々による救済の求めに対し、動き出さずには居られない人々の姿が、時代的特徴を生み出していく様子として描き出されている。それによって当該期の社会事業が活発化している様相が私には興味深く感じられた。検討会では、より論点の明確化、錬磨が求められ、今回紀要掲載の運びとはならないが、この研究が進展することで、まさにそこに、生きられた経験の迫りとして、「歴史」の生起をより見させられる思いがしたのだった。

以上のように、新たな資料や視点・方法の更新によって、これまで気付き難かった歴史の側面として浮かんでくる様子に目を向けていこうとするのが教学研究の今であるように思う。私自身は、昭和初期に生きた一人の青年への注目により、個人の経歴に当該期の社会状況やそこでの問題意識を読み取りつつ、それらと交錯す

るような当時の信仰者の信心希求に迫りたいと取り組んでいる。それぞれの人間の動きが、従来の歴史像に新たな見え方を投げかけるはずだとの期待からだ。

紙面の都合上書き切れなかった他の研究報告も大変に面白く、原子爆弾をめぐる人々の経験や、「教祖」像を求めての信心の語り、金光大神と人との金銭のやりとりの実際などを取り上げた報告がされており、それぞれの側面から本教信仰の歴史に光が当てられようとしている。これらの研究から、どのような歴史のありようが浮かびあがってくるのか、楽しみである。

(奈良・田原本教会)



第22回教学講演会(4月2日)

## ニューフェイス

研究生

大武 利沙

(大分・別府教会)

研究所に入る前は、入所したら難しい論文を読んで、難しいことを考えて、難しい顔をする毎日になるのかなと想像していました。入所して数日が経った今、想像と全然違ったことを実感しています。一見すると「理解不能だ。私には難しすぎる」と本を閉じたくなってしまいうような論文でも、言葉の意味を調べたりメモをとったりしながら読んでみると、内容が整理できていき、読むことがだんだん面白くなることを知りました。また、ひよっこの私の話でも優しく受け止めてくださり、私にない視点からのアドバイスをくださる先輩方がいるこの環境で、自身の思考がどのように展開していくのか、全然想像もつかないこれからの日々が、とても楽しみです。



## 研究所と私

### 自分に出来ること

主事 柏原正一



私が学院を卒業したのは平成二十一年、立教一五〇年の年。卒業後は、九年間財務部（内、一年半は経理室）の御用にあたり、研究所の事務室に来たのが四年前になる。

財務部時代、研究所の人たちに対しては、研究が御用の中心ということから、話しかけにくくのではないかと、話の内容が難しいのではと勝手なイメージを持っていた。しかし、実際は皆優しく、思いやりをもって接して下さるし、難しいようなことでも相手に伝わるように工夫をこらして話して下さり、日に日にかつてのイメージは薄れていった。遠くから見ているイメージと実際に肌で感じることは違っていたと反省している。

人柄のみならず、御用の上でも新たな発見は多々ある。とりわけ印象的なのは、物事の取り

運びの順序や流れを大事にされることと、稟議、回覧、礼状などの文章に沢山の手が入ること。

私が財務部に配属される前の本部実習生時代に、当時の佐藤光俊教務総長が「本部職員は文章の書き方がわかっていない」と仰っておられたことをしばしば思い出す。今の私にとって、文章の書き方を学ぶことは、自分のスキルを上げる上で、非常に大切なことだと思っている。学院を卒業した後、本部職員になる人は、研究所の御用を経験した方がよいのではないかとさえ思う。

ところで、事務の御用を進めていくことに徐々に慣れてきてから、日々考えるようになったのは、文章を書くのが決して得意でない私だからこそ、通常の御用以外に、私に何ができるのかということだ。そうして、以前から気になっていた研究所の周囲の環境を整えていくことに思い至った。

例えば、門から建物に至る道中の両側の斜面は、自然に溢れ、綺麗な空気を吸っているようで心地よくもあったが、中々手入れが行き届かないところもあり、薄暗いと感じていた。ちなみに、研究所洋館と森田八右衛門顕彰碑との間の斜面と、駐車場となっている前庭と学院との間の斜面は、防災ハザードマップ上で注意を要する区域に指定されており、土砂崩れの恐れ等の潜在的な危険性を伴う場所となっている。

さて、昨年からは、時間のあるときに、門付近の雑木の手入れを始めたのだが、まだ納得のいくような状況ではない。以前よりは敷地内に陽光が差し込み、明るくなったと感じている。今後も、環境整備に向けて、出来ることから取り組んでいき、本所を訪れる方々が周囲を見ながら「良いところだね」と思ってもらえるようにしたい。

(広島・三庄教会)



研究所正門付近 (5月)

# 彙報

(令和三年六月一日  
〜令和四年五月三十一日)

## ▲ 人事関係 ▼

### 一、職員

○所長大林浩治、六月三〇日で任期満了、翌七月一日付で再任。○部長岩崎繁之、六月三〇日で任期満了、翌七月一日付で再任、第一部長に指名。  
○書記金子信栄、八月一日付で主事に任命。

### 二、研究生

令和三年度  
○研究生三好儀生、九月三〇日付で委嘱期間満了。  
令和四年度  
○教徒大武利沙、五月九日付で研究生を委嘱。

### 三、研究員

○研究員佐藤武志、一月三〇日で委嘱期間満了。○教師高橋修一、一月一日付で研究員を委嘱。○研究員野中正幸、四月一九日付で研究員を辞任。○教師栗原隆治郎、四月二〇日付で研究員を委嘱。

### 四、評議員

○教師大代信治、四月二〇日付で評議員に任命。  
※五月三十一日現在  
所長、部長三名、幹事、所員三名、助手二名、事務長、主事三名、研究生一名(計一五名)、嘱託六名、研究員八名、評議員六名。

☆ おめでた ☆  
出産

○所員堀江道広・久子夫妻に、四月一六日、長男遥仁くん誕生。



研究生入所式(大武利沙研究生、前列右から2人目)

SAKAMICHI

今年も通信『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂

くことができました。所外から玉稿をお寄せ頂きました先生方には、厚く御礼申し上げます。

今号は、昨年末お隠れになった瀬戸美喜雄先生への追悼記事を掲載させて頂きました。

皆様の原稿を拝読いたしておりますと、それぞれの方と親しく接しておられる情景が目につかぶようでした。先生方、お一人お一人の思い出を共有させて頂くことのできる、得がたい機会となりましたことを、誠に有難く思います。

瀬戸先生は、かつて本紙への寄稿の中で「朝、目がさめれば神様が起こされたものと思い、「ままよ」と思うて午前一時であろうと、二時、三時であろうと、起きて祈念することになっている」(第四一号)と仰っしゃっておられます。改めて、教祖様の御信心に迫ろうとなされた、先生の信心姿勢を偲ばせて頂きました。

霊の神様として、瀬戸美喜雄先生がここからの立ち行きの上にさらなる大御陰を蒙られますよう、謹んで御祈念申し上げます。

㊦

発行・印刷 金光教学研究 研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五) 四二―三二一七

FAX (〇八六五) 四二―三二一九

<http://www.konkokyo.or.jp/kyogaku/index.html>